

## 巡礼の近代性

### ―一九〇五年の西国三十三所順礼競争―

森 正人

#### 【要旨】

本稿は一九〇五年に大阪毎日新聞社が開催した「西国三十三所順礼競争」に注目し、それが日本の近代化のプロセスに埋め込まれる様態を検討する。ここではギデنزの近代性の三つの側面、すなわち、時間と空間の切り離しと再編成、象徴的通標（貨幣）や専門化システムをととした信頼に基づく社会関係の切り離し、思考や行為を吟味する再帰性が、順礼競争においてどのように現れていたのかを考える。競争という言葉が表すように、それは札所寺院間の空間的隔たりを交通機関を用いることで乗り越え、巡礼空間を圧縮し、それにより巡礼に要する時間を短縮しようとした。また、空間的に隔たった場所の地理的情報を、電信システムを用いながらできるだけ早く読者に発信したのである。順礼競争において巡礼の事物や行為の吟味も行なわれた。すなわち、慣習として巡礼に携帯してきた物品や衣装は取捨選択され、動きやすさを重視するために洋装も取り入れられた。情報伝達のための時間と空間を圧縮する近代的な装置の新聞社は、巡礼を宗教的な文脈からいったん切り離し、娯楽、観光、学問の文脈へと位置づけ直していった。とりわけ巡礼中に記される記事は、各地の地理的データの収集にも寄与した。その中で、巡礼空間の風景もまた、前近代的な風景観や身体感覚に根ざした宗教的な風景観とは異なり、風景を風景として対象化する近代的な風景観によって描写された。

#### 一 はじめに

前日夜半から降っていた雨が一時やんだ一九〇五年十月六日の早朝、二人の巡礼者が西国巡礼の旅に出た。一人は湊町駅（現在のJR難波駅）から列車に乗り込み、柏原駅で河内鉄道に乗り換えて五番札所の藤井寺を訪れた。彼はその後、西国巡礼の札所寺院を右回りで巡ることになる。もう一人は、現在の大阪駅から阪鶴線（現在のJR福知山線）に乗り込み古市駅で下車し、二五番札所清水寺を訪れた。その後札所寺院を左回りで巡る。

この二人はただの巡礼者ではなく、大阪毎日新聞社の記者だった。名は福良竹亭と今井黄村。彼らは社内での健脚として知られており、この新聞社が企画した「三十三所順礼競争」でそれぞれ正反対の方向で巡礼を行い、どちらが早く大阪毎日新聞社本社へ帰ってくるのかを競った。記者は毎夕、その日の見聞を電報で本社へ送信することも義務づけられ、読者はそれを翌日に自宅で読むことになった。

今より百年ほど前に新聞社によって催されたこの順礼競争は、管見では、マス・メディアが初めて大々的に巡礼を取り上げたものである。本稿がこの企画に注目するのは、単にそれが日本最初の試みであっただけではなく、日本の近代化のプロセス、とりわけ時間と空間の再編成に巡

礼が埋め込まれる過程を顕著に表しているためである。

社会学者のアンソニー・ギデンズ（一九九三）は、一七世紀以降、世界中に広まる特定の生活様式である近代性を三つの側面から捉えた。すなわち、時間と空間の切り離しと再編成、象徴的通標（貨幣）や専門化システムをととした信頼に基づく社会関係の切り離し、思考や行為を吟味する再帰性である。この三側面はそれぞれ自律しているのではなくつねに相互に関係しながら近代性を構成してきた。かつてコインの表裏として相互に関わっていた空間と時間は、西洋の近代において測量やニュートン力学などによりそれぞれ別個に計測され、また均質化されたのである。本稿は巡礼に見る時間と空間の切り離しと再編成の過程、それに付随する巡礼行為の再吟味の過程をとくに検討する。

「順礼競争」という語が指し示すように、これは巡礼における速度を争うイベントであった。競争に身を投じた二人の記者はできるかぎり鉄道を利用し、日本の国土に網の目のように張り巡らされた電信を利用して巡礼の様子を本社に伝えた。彼らは巡礼の空間的障壁を近代的な交通システムを用いながら乗り越え、巡礼に要する時間を切り詰めようとしたのである。それは、時間を遵守し、かつ合理的に使うという近代的な時間への意識と深く関係している。そしてそのような巡礼の速度化を可能にする交通システムは、空間を測量・計測することで作り出される均質な国土空間創出の試みによって支えられていた。

記者たちは記事にした巡礼の経験を、電信によって本社へと伝えた。電信も、そして彼らの勤務する新聞社もまた、国土空間に情報のネットワークを張り巡らせるという意味で均質な国土空間の創出に貢献する近代化の装置であった。空間的現象である交通ネットワーク、電信ネットワーク、そして新聞は、瞬時に特定の空間にある事物を媒介するメディ

アであった。一九〇五年の順礼競争は、こうした近代国民国家に顕現する時間・空間の再編成、すなわち近代化のプロセスに現れ得た。

筆者はすでに四国遍路巡礼が近代においてどのように変容してきたのか、当時の社会的過程を検討しながら明らかにした（森二〇〇五）。こうした巡礼の近代性をさらに理解するために、本稿は大阪毎日新聞社がおこなった「三十三所順礼競争」に注目したい。資料として『大阪毎日新聞』の記事を用い、言及や引用の際には基本的には記事が掲載された年月日だけをカッコ内に示すこととした。また、資料提示に際しては、できるだけ現代の仮名づかいに変更し、また適宜句点を付してある。さらに、この企画は「三十三所順礼競争」と題されているが、企画題目以外は「巡礼」を用いる。

## 二 近代の時間と三十三所順礼競争

順礼競争の開催された一九〇五年は、日露戦争の勝利に沸いた年である。戦争中は戦況を大々的に取り上げ国民感情をあおっていた新聞各社は、戦争が終結すると読者獲得のための企画をこぞって打ち立て始めた。『大阪朝日新聞』の後塵を拝していた『大阪毎日新聞』も同様の企画を立てていた。そして、一九〇六年に鉄道路線が五千マイルを突破することの前祝いとして、一九〇五年の夏に記者二名による鉄道競争が催された。そしてこの鉄道競争をさらに発展させた企画が順礼競争であった。

なぜ巡礼が選択されたのだろうか。その一つが戦争を契機とした巡礼への関心の増大であったようだ。たとえば、

今度の戦争のためにお札所の参詣者は一面には減つたが一面には増して居る、減つたのは世間の景気に伴ふた普通の道者で講中の大連などは参詣を見合した向もあつたが増したのは軍人家族の参詣で何れの札所でも出生軍人何の歳男と銘打つた納経札の貼られて居ないところはない（一九〇五年一月二十二日）。

という記事からは、出征兵士の家族が兵士の安全を祈念して「千社札」を貼付しながら巡礼を行つていたこと、とりわけ二十六番札所の法華山一乗寺に安置された観世音菩薩には千社札の貼付が著しかったことなどが分かる。日露戦争は一方では従来からの巡礼者を制限したが、他方ではこれまでとは異なつた巡礼者たちを呼び込むことになった。巡礼者や巡礼に関心を持つ人びとが増加したのである。

このような関心の高まりの中で、一九〇五年九月の末、次のような告知文が第七面に掲載された。少し長くなるが引用したい。

西国三十三所札所の順礼は老幼の善男善女が順礼しつゝ、遍路するものとて早くて三ヶ月遅いと一年間かゝるものと云はれて居つたが、それは文明の利器を応用せぬ昔の話で今日最も早い方法で遍歴すれば幾日を要するであらうかといふ事は遍路といふ事を離れて旅行家として考へても一寸趣味のある問題であらうと思ふ、（中略）前回の鉄道競争は重に列車中に起臥し唯五ヶ所の社寺に参詣するだけであつたが西国三十三所はその所在が紀伊、和泉、河内、大和、山城、近江、丹波、摂津、播磨、丹後、美濃の諸国に亘りその霊場多くは深山幽邃の境にあつて、加ふるにこれ等の霊場及び遍路については古来幾多の因縁奇談の多いところであるから、両氏が日々途上より

發する電報通信は鉄道競争に勝る趣味があるだらうと思ふ（一九〇五年九月二十八日）

この文章からは巡礼に要する時間への関心を読み取ることができる。鉄道に代表される交通ネットワークを用いた巡礼がどれほどの速度であり、それによりどれほど時間が短縮されるかを、競争を通して明らかにしようとしているのである。

明治以降、近代国民国家が立ち上がり、近代資本主義システムが展開する中で、時間は人間の規律化に対する効果的な方策であつた（橋本・栗山二〇〇四）。近世までの不定時法に代わって一日を等分する定時法が取り入れられるのは一八七三年一月である。そして、鉄道の分刻みの時刻表こそが、時間による規律化の装置だった。とりわけ、日露戦争前までは一時間以上の列車の遅延が問題視されるが、日露戦争中の戦地への物資輸送等の問題もあり、鉄道における時間の遅延は改善されていった。しかも、時間の厳守だけでなく、先に挙げた文章に「今日最も早い方法で」とあるように、速度も重視されていた。それは、合理化を追求する近代の時代性を表している。

資本主義の展開と近代戦争において、科学的技術を介しながら時間を圧縮していく社会の有り様を、イタリアの思想家ヴィリリオ（二〇〇一）は「速度術」と呼ぶ。この時期の日本はロシアとの戦争を終え、近代資本主義の展開を目前にしていた。巡礼においても速度への関心が強まっていたことは、次の記事からうかがうことができる。

其の里程には約四十七里余にして徒歩にては早きも三ヶ月を費せど今は汽車汽船の便あり順廻り逆廻りなどの方法によらず現時の交通

機関によりて順序を定めず唯だ三十三ヶ所を残りなく廻るに何日を要するやを知らんとするものなり（一九〇五年十月一日）

さらには、「仮令<sup>たとえ</sup>ば汽車の乗換、舟車接続の場合、或は、札所の参詣を済まして他に向ふ時などはその都度迅速に電報を發せしむる」（一九〇五年一〇月六日）という文言からは、交通・電信ネットワークによる速度への関心を読み取ることができよう。

こうした日露戦争を介した日本国土の時間化、そしてそれによる人間の規律化の中で、大阪毎日新聞社の一連の企画を理解する必要がある。つまり、日露戦争終了後に大阪毎日新聞社は記者二名を競争させる鉄道競争を行っており、それは時間に対する人びとの関心を基盤としていたし、そうした関心を喚起しようとしていた。同様に、西国三十三所順礼競争も、どちらが早く三十三の札所を回り終えるのかという時間への関心を喚起していたのである。

### 三 空間の近代化と西国巡礼

#### （一）空間への関心

均質な国土空間創出を目的とした明治政府は、交通網の整備を国家的な事業と位置づけ、推進した。当初は汽船を停泊させる港湾整備が積極的に行われたが、一八七二年に新橋と横浜間に鉄道が敷設されて以降、官設鉄道や私鉄が日本の鉄道ネットワークを張り巡らせる。鉄道は国民に対する時間の規律化と同時に、国土空間の創出に重要な役割をはたしたのである（水内二〇〇一）。

西国順礼競争の記者は、京都市の一五番観音寺へといたる山道を人力

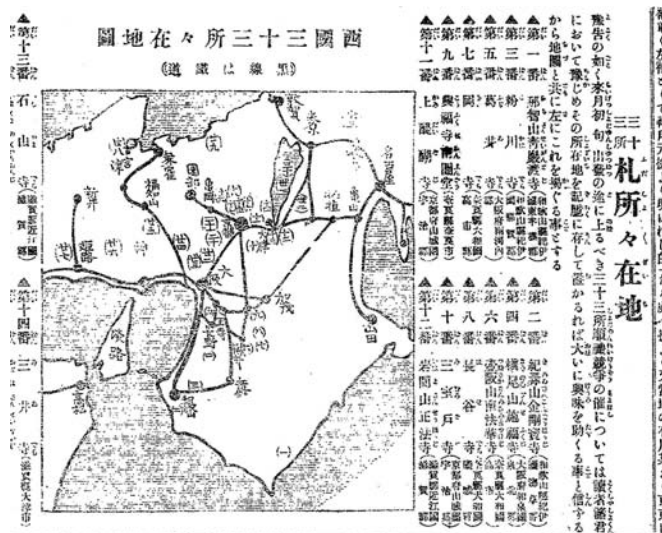
車をあえて用いずに歩くことを「本式の順礼」（一九〇五年一〇月七日）としたが、実際にはできる限り交通機関を用いようとした。そもそも、本式の巡礼という物言いはそれとは異なる様式が登場してはじめて可能になる。徒歩という原初的な移動手段と理念的に對置されているのは、同時期に伸展しつつあった近代交通機関である。

順礼競争が紙面にて初めて公表された翌日の九月三〇日の紙上には三十三の札所の所在地と鉄道の路線を書き込んだ地図が掲載された（図一）。発行年は不明だが、近世に発行されたと思われる西国三十三方所巡礼の地図（図二）と比較すると、数点の違いが指摘できる。まず、図一、図二それぞれは寺院間の相対的な距離と方位を比較的確に表現しているものの、図一は近代的な測量方法をとって作成された地図をベースにしているのに対して、図二は前近代的な方法で作成されたものをベースにしていることが指摘できる。また、図二には寺院間の地名や距離が記されていることも指摘できる。もちろん、図一と図二はそれぞれ地図のスケールが異なるために、スケールの大きな図一ではそうした情報が記載されなかったともいえるが、その代わりに図一は鉄道が示している。

図二に細かな地名と距離が記載されているのは、巡礼者の徒歩による空間的移動を前提としているからだと言える。歩行する巡礼者にとって、村名とそこまでの距離は重要な情報である。一方、図一は個別の地名や府県名は除かれ、各札所寺院を結ぶ鉄道路線だけが明示されている。

さらに、図二は巡礼ルートがうねるような曲線で描かれているのに対して、図一はそれぞれの寺院を結ぶのは鉄道だけであることも指摘できる。うねるような巡礼路は身体の時間的・空間的移動を表象する。一方、図一が示す鉄道路線は、いくつもの札所寺院を結びつける近代的な空間編成を表象する。それは個別の府県名や地名を捨象し、札所間を直線的





図一 大阪毎日新聞に掲載された札所寺院の所在地

につないでいくのである。そこでは寺院間の空間的隔たりが克服され、それによって巡礼行為が速度化される。近世的な時間的・空間的移动がともに表現された図二とは異なり、時間と空間が分けられた上で、時間を短縮するために空間的障壁が圧縮される、つまり時間に従属する空間概念がここからは分かる。このように、時間と空間を分断し再編する近代化のプロセスを図一は示している。

順礼競争に見られる近代的な空間への関心は鉄道の利用にとどまらない。先に挙げた九月二十八日の記事には、日本の周縁部、そして寺院に



図二 近世に印刷された西国順礼の絵図

関する情報を大阪周辺の読者へ積極的に伝えようとする意図も見える。「深山幽邃の境」や「因縁奇談」を持つ巡礼や寺院の情報、すなわち日本の空間情報の提供が、この企画の要点でもあった。後述するように、記者たちは単に三十三の札所寺院を巡るだけでなく、自らの体験を紙上に掲載していた。それにより、大阪周辺の読者にはなじみの薄い空間情報が提供されたのである。

また、この企画では三十三の札所の印鑑を五枚一組の絵葉書にして、読者への懸賞品としていた。この懸賞を得るためには、記者による記事の一字ないし二文字にふられた傍点を毎日探しだし、傍点がふられた文字をメモし、そして最終的に集まった文字からいくつかの札所寺院の名称を探しだし、応募しなければならなかった。読者は入念に記事に目を通すことが求められたのである。新聞社は応募者の先着五千名に懸賞

品を送付した。

電報だけでなく、情報ネットワークの再編成について、競争終了後に記者の一人は次のような文章を掲載している。

これ（郵便…筆者注）はむかしの巡礼が受けることの出来なかつた幸福、それからお札場にはどんな山中でも苟くも人家のあるところには郵便受取所があるので那智の山上よりも松尾山の絶頂よりも自由に郵便を出すことの出来るのはこれも亦た文明の賜でむかしの順礼が夢にも知らないとい（一九〇五年一〇月二十二日）。

一八七二年以降、全国的に展開する郵便制度もまた、巡礼の有り様を変容させていったことがわかる。

こうした時間と空間を再編する近代化のプロセスへの巡礼の埋め込みは、二人の記者がその日の出来事を記事にして、毎日電報によって本社へ送信していたことから理解できる。電信ネットワークは一八六九年に東京都横浜間での電信線の開設によって始まり、以後、一八九九年には東京都大阪間の長距離市外通話が始まるなど、日本全土にくまなく張り巡らされていく。山根（一九九九）によれば、こうした電信ネットワークの伸張が個々の地域が持つ特性を日本という全体性に統合していく効果を持ちえた。電信ネットワークは均質な国土空間の創出に重要な役割を果たし、また空間を隔てた読者と記者との関係をも作り上げていった。それだけでなく、「読者は右記事の現はる、間は社交及び家庭に面白き話柄を作らるゝならん」（一九〇五年一〇月一日）とあるように、読者の対人関係をも刷新する可能性を持っていたのである。

表 順礼競争の日数と移動手段

日数	福 良		日数	今 井	
	番号	移動手段	番号	移動手段	
1	5	列車	1	25	人力車／列車
	9	列車	2	28	人力車／船／列車
	8	人力車		29	汽船／人力車
	7	人力車		24	列車
2	3	不明	3	27	人力車／列車
	2	列車		26	人力車
	4	人力車	4	33	人力車／列車
4	1	汽船／人力車		32	人力車／列車
	22	汽船／人力車／列車	5	14	列車
6	27	人力車／列車		30	汽船
	26	人力車		31	汽船／人力車／列車
	25	人力車	6	13	列車
7	29	人力車／列車		12	人力車
	28	汽船／人力車		11	徒歩
8	24	汽船／人力車／列車		18	人力車／列車
	23	人力車／徒歩／列車	7	19	列車
9	33	人力車／列車		17	不明
	30	人力車／船		16	不明
10	32	汽船／人力車／徒歩		15	不明
	31	人力車		20	列車
	14	徒歩／列車		10	列車
	13	人力車		9	列車
	12	人力車／徒歩	8	8	人力車／列車
11	15	人力車／列車		7	不明
	21	人力車／列車		6	人力車
	18	人力車／列車		3	人力車／列車
	19	人力車		2	人力車／列車
	17	人力車	10	1	汽船／人力車
	16	人力車		23	人力車／列車
	11	人力車／徒歩	13	22	人力車
	10	人力車		4	人力車／徒歩／列車
			14	5	徒歩／列車

注 移動手段の種別を示すことを目的としているために、札所間の各移動において複数回同一の手段を使った場合を考慮しない。また、移動手段の表示順は五十音順で示している。

## （二）巡礼手段と制約のはざま

競争開始の一〇月六日、右回りの福良竹亭は午前五時五十五分に湊町駅、左回りの今井黄村は午前五時に大阪駅を発った。

表は、二人の記者が三十三の札所を巡礼するのに要した日数、巡礼のルート、移動手段を示している。表から分かるように、福良竹亭が十二日目（正確には十一日と七時間三十分）、今井黄村が十四日目に三十三の札所を巡り終えている。列車を、福良は一三回、今井は二〇回使用している。この順礼競争では各自が時刻表を参照しながら巡礼の行程を検

討したため、列車の使用回数が異なったのだと思われる。この当時「十三箇所」の四分の一（一九〇五年一月二日）は関西沿線に点在するというように、鉄道のネットワーク化がずいぶん巡礼を容易にしている。このことは、一九二〇年代末頃まで列車の使用が難しかった四国遍路と対照的で、西国巡礼はかなり早い時期に鉄道ネットワークと関係を持っていたことが理解できる。なお、福良が巡礼を終えてもお札所巡りを続けなければならなかった今井は「勝負のついた後をノコノコ走る程気のきかぬ話はあるまじ併し寺判を全部収め得ずして中途に止めるは後の世も恐ろしく殊に中止などといふ弱行は男の面に出来たものにあらず、構ふものか笑はゞ笑へ」（一九〇五年一月二日）と語る。

鉄道によって結ばれていない札所への移動は人力車によって補われた。列車が停車場に到着すると容易に人力車をつかまえることができたことが、巡礼記事からはうかがえる。しかし大阪毎日新聞社は、人力車を一人曳きで各霊場の参詣時間に限るといふ制限を設けていた。これは一方で、人力車で延々と巡礼を続けて距離を稼ぐことを制限していると推測されるが、順礼競争の意義の一つを「如何に巧に文明の交通機関を利用し競争の目的を達し得るや」（一九〇五年一月二日）にあるというように、人力車が文明の利器ではないという意識もあった。

表からは汽船を福良が五回、今井が四回使用しており、それぞれ独自に巡礼ルートと交通機関を検討したにもかかわらず、列車と違い使用回数に差が見られないことが指摘できる。具体的には和歌山市から一番札所那智山、京都府の舞鶴から宮津の航路、そして滋賀県の長浜から琵琶湖にある竹生島への汽船である。再び図一を見れば、これらの札所には鉄道の線路が敷設されておらず、「往復一週間以上を要すれども和歌山より汽船に投ずれば三日間、若しくは四日間」、あるいは「今日舞鶴よ

り宮津へ汽船便あり僅に一時間半にて達せらる」（一九〇五年一月四日）ために、陸路よりも汽船の航路が用いられたのである。

八日目まで今井が圧倒的に競争をリードしていたが、現在の和歌山市と那智勝浦町との大阪商船を用いての往復に四日間を要してしまい、結果的に福良に先を越されてしまったことが表から分かる。福良は同ルートを同じ移動手段を用いて二日程度ですませている。これは時化のために那智勝浦からの復路が運航を延期し続けたことが原因である。船内には鰯を那智勝浦から和歌山市へと運ぶ人も乗船しており、それが腐りかけていることなども記事に収められている。ようやく和歌山に汽船が到着した第一二日目も、汽船の遅延のために大阪へと向かう最終列車がすでに発車した後で、一二日間で回り終える今井の予定は大幅に狂った。

このほか、記事からは道路のぬかるみや、山道の険しさと整備不良のために徒歩で一二キロ程度を歩くなど、まだ道路を利用する交通機関が十分ではなかったことがわかる。道路整備とその上を走る道路交通機関の充実によって、人力車は時代が下ると乗合自動車に取って代わられたと考えられるが、その検討は別にゆずる。

## 四 巡礼の近代化

### （一）宗教性と近代性

このような近代化のプロセスにおいて、西国巡礼の「伝統」や宗教性が再帰的に吟味されていく。

まずは巡礼に必要とされる物品について見てみよう。競争前に掲載された、西国巡礼の概要を説明する一〇月五日の記事は、かつての巡礼者の必携品として守袋、寺送り往来切手、薬品々、めしごり、水呑、櫛あ





図三 一八九五年に発行された霊場記

ぶら元結い、糸はり、小刀、矢立、磁石盤、火打つけ木、ちょうちん、ろうそく、手ぬぐいを紹介する。ちなみに、順礼競争の十年前の一八九五年に京都市に住む内藤彦一が発行した『西国順礼霊場記』（図三）を見ると、巡礼に関わる事物として菅笠、白衣、収め札だけが紹介されている。さて大阪毎日新聞はこれらのいくつかを時代遅れのものとして一蹴し、巡礼に持参する用品の再吟味を行なった。その結果記者は旅行案内、西国巡礼順路図、鉛筆、封筒、手帖、折手本、手拭・半紙、薬品、観音経、念珠、電報用紙、郵便切手葉書を持参した。

旅行案内、西国巡礼順路図が具体的にどのようなものかは不明である。鉄道省による『全国旅行案内』は当時まだ刊行されていないことから、旅行案内とは当時用いられていた『汽車汽船旅行案内』であった可能性もある。順礼競争が紙上に発表されると、読者から「道中手引案内」、



図四 大阪毎日新聞の記事と記者のイラスト

「旅行記等」（一九〇五年一月二日）が寄贈されたとあり、道中手引案内もおそらく前近代的な様式のものと思われる。ちなみに、二年後の「四国八十八箇所霊場巡礼」の記者は、旅行中の様々な問題に対処するために『旅行用心集』という本を持参していた。

記事には、白衣を着て、菅笠をかぶり、杖をつく巡礼者のイラストが付されていたが、実際には記者たちはどのような衣装を身にとっていたのだろうか。これについては、「最初は普通順礼の如く無東西、迷故三界城の菅笠を冠り納札箱を胸にぶらさげ金剛杖を突いて三十三所を遍歴せよと主張する社中の弥次馬連多かりし」と言うが、結果的には時間

が間に合わないという理由で「矢張背広の洋服に脚絆草鞋掛といふ身軽の打扮」（一九〇五年一月三日）となった。これらの服装は「ハイカラ」な男性の服装であり、四国遍路もこの種の服装で行われた（森二〇〇五）。図四は順礼競争第一日の様子を告げる記事に付されたイラストで、菅笠をかぶり、洋服のジャケツトを着た記者が電報を打っている。同日の記事には洋服と帽子を着用し杖を



持つ二人の記者の写真が掲載されている。

この順礼競争は学問や観光などすぐれて近代的な知へ資することも企図していた。「仏恩報謝のためのみならず歴史、地理その他人生に関係せる問題を研究する人には好個の資料となるべし（中略）果たして然らば今回の挙は信心家、旅行家のためのみならず学界に多少の貢献あるべしと信ずるなり」（一九〇五年一月二日）という文言は、宗教というコンテクストから巡礼を引きはがし、近代化のプロセスへと埋め込もうという意思を含蓄している。

具体的に、記者たちはどのような資料を提供したのだろうか。ここでは彼らの記した風景描写を検討してみよう。記者たちは巡礼中に目にした風景について

巨鯨潮に吼ゆる熊野の朝ぼらけ、玉兔波に躍る竹生嶋の夕、さては猿も小蓑をほすてふ松尾山の初時雨、客舟愁いを載する与謝海の漁火など自ら眼底に映じ来りて順礼と同化するの心地せらるべく（一九〇五年一月六日）

と記しており、巡礼者たちと同じように風景を眺めていると言う。そして風景を仔細に描写した。

たとえば、滋賀県にある十二番札所岩間寺周辺に関する次の文章を見てみよう。

醍醐山の脊山に掛りたるに森林生茂りて昼尚暗く梟バサバサと飛び陰気なること限りなく、且道は随分險阻なり、薄気味悪く思ひ居たる時右手の石垣より人の足音を聞き獲物御座んなれと思ひしか又々一尾の

蛇ニヨロニヨロと半分体を出し鎌首を擡げ（以下略）（二〇月一三日）

この描写は巡礼中に目にする風景の不気味さを強調する。そのような描写は、巡礼の宗教的な奥深さと同時に、新聞読者の居住する大都市では目にすることの少ないエキゾチックなものとして風景を提示している。周辺部に取り残された、しかも西国巡礼という土俗的習俗の風景として、都会の風景と差異化しようと言えよう。

記者の福良竹亭が和歌山県にある一番札所那智山での見聞を記した次の文章も見てみよう。

瀧道に下る石段を下ること数百老杉道を挟んで昼間暗く瀑声おどろおどろと日々来て満山振動するかとばかり応て瀧の拝殿に到り大滝に面して立つ飛沫衣袖を打つて心憺寒く削りなす千仞の絶壁銀河天上より落つるの概あり、下は即ち大石累累急湍となり文覚の瀧となる（一九〇五年一月一日）

福良のこの自然描写は、目の前の風景を宗教的なものではなく、あるいは近世に理念化されていた水墨画的なものではない。彼のまなざしはそれを「風景」として切り取るうとする近代的感覚に基づいていると言えよう（柄谷一九八八）。

## （二）人びとの関心

この順礼競争は、瞬時に、空間を越えて情報を伝達する近代的な装置である新聞社によって企画された。新聞社は情報の伝達媒体であるばかりでなく、自ら情報を作り出し、近代的自我を持つ読者を誕生させる役

割も担っていた。

ではこの順礼競争はどのような社会的効果を持っていたのだろうか。

一九〇五年に順礼競争の開催が発表されると、西国巡礼の札所寺院を結ぶ鉄道各社、旅館などの宿泊施設、小売店などが企画の趣旨に賛同し歓迎の意を表している。鉄道会社はこれによる増収を視野に入れていることがはっきりと紙面に記されている。また、小売店は、競争の勝者と敗者それぞれに念珠、薬品等の物品を贈与した。これらの店舗名と住所は紙上で公表されたので、宣伝効果もあったと思われる。

大阪市道頓堀の朝日座は、十一月の興行にこの三十三所順礼競争を演劇化し上演した。同じく大阪市千日前の改良座（十郎一座）も一月一日より「西国三十三所順礼」を狂言に仕立てて上演した。とくに朝日座の一行は、記者を激励するために出発日の早朝に新聞社を訪問している。すでに記者が発売していたために記者を八日間にわたり札所寺院で待っていたものの、記者に会うことがかなわなかった。しかし、記者の一人が競争を終えた一月一日、残る一人の記者を激励するために再度札所寺院に向き、最終日の二〇日に四番札所で記者に出会った。

増収や宣伝をねらった反応だけではない。競争開始前の一月四日には、兵庫県にある二五番札所清水寺の住職が新聞本社を来訪し、阪鶴線の古市駅と相野駅それぞれから清水寺への行き方を教授している。また、巡礼競争に先立って同じ大阪毎日新聞社の企画した「遊泳競争」への参加者の父親は、この巡礼競争に賛意を示し、記者たちを歓迎するために奔走していることも記事にされている。このように、順礼競争がその開始の前に、人びとの関心を引きつけていたことがうかがえる。

順礼競争が開始すると一現地での一層の熱気が記者たちを待ち受けていた。新聞を通してこの企画を知り得た札所寺院の住職や周辺住民の中

には、記者たちに食事を振る舞ったり、寺院内を案内したり、あるいは物品を贈与したりした。また記者たちが毎日送信する記事をもとに、今や遅しと次の場所で記者を待ちかまえる人もいた。こうした例を挙げればきりがなが、たとえば奈良県の七番札所岡寺では住職、旅館の主人、粉河駅長などから熱烈に歓迎し、和歌山市の三番札所粉河寺では土地の有志者が案内をし、花火まで打ち上げている。この粉河寺にもう一人の記者が訪れた際にも、紫の布地を白色で大阪毎日新聞社特派三十三所霊場競争歓迎第三十番粉河寺と染抜いた旗を掲げる男性がいた。その様子は次のように記されている。

粉河寺へ進む道路にはソレ毎日新聞の巡礼が来たと忽ち人を以て埋め押す押しの騒なり、まもなく第一第二の山門を越え本堂前に到れば正面には大なる五色の旗を交叉し一木住職を始め諸僧盛装して出迎へらる（中略）停車場に引き返へせば沿道の人前にも増して多く煙花は盛に打揚げられ歓待好遇到らざるなし煙花は最初に老人を揚げ後に鶴を出す「オイヅル」といふ意味にて我等のため殊に造られたるもの身に余りたる光榮を担ひ感謝の言葉なし

関心を持ったのは寺院関係者や地元住民ばかりではなかったようだ。新聞の投書欄では、懸賞品とされている絵葉書は一般販売されるのか、あるいは懸賞に申し込むための寺の名前は山堂の名前まで入れるのかという問い合わせを確認することができる。また、毎日の記事にふられた傍点が分かりにくいという苦情も寄せられたという。

さらに、記者の福良は、滋賀県の竹生島でこの企画によって西国巡礼を思い立った人との遭遇について次のように報告している。

恰も東京神田薩摩治兵衛氏の婦人令息ら参拝の為に来り居り、夫人はわが毎日新聞を見て西国順礼を思ひ立たりとて召使を介して那智行の道などを聞かる（一九〇五年一〇月一六日）

召使いを従えていたということは、彼らがかかなり裕福な家庭の出身者であると予想される。大阪毎日新聞社は、「一層世人の好尚に投じて其歓迎を受けるに至りしものならむ」（一九〇五年一〇月三日）という目的を掲げていた。そして日本に居住しすでに西国巡礼を行なった経験を持つ外国人を紹介しながら、「今回本社の競争順礼の挙により今後一層是等異種の参拝者の数を増す事なるべし」（一九〇五年一〇月二日）と言う。実際に巡礼派がどれほど増加したかは不明だが、新聞社による巡礼のイベントとその報道は、不特定多数の読者による西国巡礼への関心を作り出したと考えられる。

## 五 おわりに

本稿は一九〇五年に大阪毎日新聞社が開催した「西国三十三所順礼競争」に注目し、それが日本の近代化のプロセスに埋め込まれる様態を検討した。競争という言葉が表すように、それは札所寺院間の空間的隔たりを、交通機関を用いることで乗り越え、巡礼空間を圧縮し、それに伴って巡礼に要する時間を短縮しようという意志を基盤としていた。また、空間的に隔たった場所の地理的情報を、電信システムを用いながらできるだけ早く読者に発信したのである。

順礼競争において巡礼の事物や行為の吟味も行なわれた。すなわち、慣習として巡礼に携帯してきた物品や衣装は取捨選択され、動きやすさ

を重視するために洋装も取り入れられた。情報伝達のための時間と空間を圧縮するという意味で近代的な装置である新聞社は、巡礼を宗教的な文脈からいったん切り離し、娯楽、観光、学問の文脈へと位置づけ直していった。とりわけ巡礼中に記される記事は、各地の地理的データの収集にも寄与した。その中で、巡礼空間の風景もまた、前近代的な風景観や身体感覚に根ざした宗教的な風景観とは異なり、風景を風景として対象化する近代的な風景観によって描写されたのであった。

以上のような巡礼の近代化の様態を順礼競争は提示している。巡礼の近代性、あるいは近代の巡礼をとらえるためには、時代区分としての近代ということ以上の検討が必要である。つまり、こうした近代化のプロセスへの脱埋め込みと再埋め込みの様相を検討しつつ、なお、前近代的なものとの折り合いをどのようにつけていたのかということにも目を配る必要があると言える。

## 参考文献

- ギデンス、アンソニー『近代とはいかなる時代か？——モダンティの帰結』而立書房、松尾精文・小幡正敏訳、一九九三
- ヴィリリオ、ポール『速度と政治』平凡社、市田良彦訳、二〇〇一年
- 柄谷行人『日本近代文学の起源』講談社、一九八八年
- 橋本毅彦・栗山茂久編『遅刻の誕生 近代日本における時間意識の形成』三元社、二〇〇四年
- 水内俊雄『開発という装置』栗原彬・小森陽一・佐藤学・吉見俊哉編『装置 壊し築く』青土社、二〇〇〇年
- 森 正人『四国遍路の近現代』創元社、二〇〇五年
- 山根伸洋『測量地図の集積と国家全域の捕捉』『現代思想』九三七、一九九九年